

兄と魚

小川未明

青空文庫

正二しょうじは、夏なつのころ、兄にいさんと川かわへいつしよにいつて、とつてきたちい小さな魚さかなを、すいれんの入はいっている、大おおきな鉢はちの中なかへ入いれて、飼かつていました。

そのうちに、夏なつも過すぎ、秋あきも過すぎてしまつて、魚さかなは川かわにいれば、もう暖あたかな場所ばしょを見みつけて冬ふゆごもりをする時じぶん分ぶんなのに、鉢はちの中なかでは、そんなこともできませんでした。

寒さむい風かぜが、野のの上うえや、森もりをふく、ある日ひのことでありました。「おや、魚さかなが死しんでいる。正しょうちゃん、早はやくおいで。」と、庭にわへ出でた兄にいさんが呼よびました。

「かわいそうに。」と、正二しょうじはいいながら、走はしつてそのそばへ

いきましました。

鉢はちの中なかには、水みずがいつぱいあつて、すいれんの葉はは、いつのまにか枯かれて、水みずの底そこの方に沈しずんでいました。

「これは、たなごだね。」

「こいみたいだな。」

「いいや、たなごさ。かわいそうに、こんなにやせてしまつて、栄えい養よう不ふ良りょうで死しんだのだよ。」と、兄あには手てのひらにのせて、悲かなしそうに、ながめていました。

「僕ぼく、ときどき、ふをやつただけけれど。」と、正しょうじ二じがいいま
した。

「川かわにいれば、いろいろのものを食たべるから、大おおきくなるのだけ

れど、こんないれものの中なかでは、ほかに食たべるものがないだろう。
 正しょうちゃん、あとの二匹ひきをかわいがってやろうね。」と、兄にいさんは、
 底そこの方ほうにかくれるようにしている魚さかなをのぞきながらいいました。
 正しょうじ二は、自分じぶんたちのいった川かわは、いま冷つめたい水みずが、ゴウゴウ
 と音おとをたてて流ながれているだろうと思おもうと、あとの二匹ひきをその川かわへ
 逃にがす気きにもなれなかつたのです。

「兄にいちゃん、あとののは、かわいがってやろうよ。」

「ほかのいれものに移うつして、お家うちの中なかへおこうね。そうして春はるに
 なつたら、また、ここへ入いれることにしよう。」

「ごはんつぶをやろうか。」

「冬ふゆは、あまりものを食たべないものだ。それより、あたたかにし

てやるほうがいいのだよ。」

正二は、兄が手に持つている魚をどうするだろうと思つて見ていました。

「正ちゃん、手すきを持つておいで。」と、兄は、いいました。

正二がものおきから、手すきを取り出してくると、兄はつばきの下に穴を掘りました。

「ああ、ここへうめてやるのだな。」と、正二が見ていると、兄は、落ち葉を探してきました。正二は、なにをするのだろうと、黙つて見ていると、穴の下へその枯れ葉をしきました。そして、死んだ魚をその葉の上へのせました。それからまた、枯れ葉をその上へしいて、土をかけたのであります。

終わりまで、黙って、これを見ていた正二は、やさしい兄の心持ちがよくわかりました。

「いい兄さんだな。」と、思いました。

「川でとつてきてから、こんなに長くいたんだもの、あとの二匹を殺しちや、僕たちが悪いのだよ。どうかして、この冬を越すよ
うに、かわいがってやろうね。」と、兄さんはいいました。

正二も、そうだと思いました。部屋へおくようになってから、寒い晩は、水をこおらせないようにしました。また、お天気になると、縁側へ出して、日の光に当ててやりました。

ある日、正二は、雑誌にのっているお話を読んでいるうちに、

おやと、びつくりしました。なぜなら、それには、こう書いてありました。

「私は死んだ金魚をどぶの中へ捨てる気にはなれませんでした。穴を掘って木の葉をしき、その上へのせて、また葉をかけて土にうめてやりました。」

「うちの兄さんと同じことをしたのだ。なんとというふしぎなことだろう?」

正二は兄のところへかけてゆくと、

「兄さん、これを読んでごらん下さい。」と、雑誌を出しました。

「なんだい、童話だね。そんなにおもしろいのかい。」

「ここんところだよ。」と、正二は、書いてあるところを指さ

しました。

兄あには、黙だまつて読よんでいました。しばらく、なにもいわずに考かんがえていました。そのうちに、

「ははは。」と、大おおきな声こえで笑わらいました。

「兄にいさんと同おなじだろう、この人ひと、兄にいさんのしたことを知しっているのかなあ。」と、正しょうじ二は、頭あたまをかしげました。

「そんなことはないよ。正しょうじちゃん、だれでも人ひとというものは、正しょうじ直ちよくであれば、おんなじことを考かんがえるんだね。僕ぼくばかりかと思おもつたら、そうでなかつた。だからよくお話はなしさえすれば、どの子こも

みんないいお友ともだちになれるんだよ。」と、兄あにはいいました。小ちいさな正しょうじ二くんも、なるほどなど、うなづくことができたのであ

ります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕はこれからだ」フタバ書院成光館

1942（昭和17）年11月

初出：「らくみん三年生」

1940（昭和15）年12月

※表題は底本では、「兄《あに》と魚《さかな》」となつていま
す。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

兄と魚

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>